

校友會雜報欄

天橋紀行 三宅勇 誠

大江山生野の道の遠ければ

まだふみも見す天の橋立 (小式部内侍)

旅空も山を重ねて山陰に行く雲並び傳ふる雁が音も、秋そよそき晩季の天橋めぐりに自分等は名もゆかしき内侍姫のあの才婉に噫呼感歎の眼を再び蘇らせて重きペンを動かさざるを得なかつた。

まだ文(踏み)も見ざる裏日本に斯した二夜の同僚の旅は、其の間鎖にまぎれくゝの友情的情緒の一筋は異様な迄の喜を未だ明い胸に透へられて居る。秋の朝日の、霧にゆらぐ午前八時、黄ばむ畦路に露打ち拂ひつ、靜かに洛北を流れ出た。東山三十六峰は未だ醒やらず靡く白雲に顔をひそめて廻り變

る車窓を何時か保津川の清流に移して居た。山又山の保津傳ひは色見る君方も初めて止め給ひし象ならん。茂ものさやかな小春日和の川岸邊、青つゞら、かづら、まさきで化粧して碩岩台の沙庭を洗ひ去る様、畿内の名河保津川ラインを稱讃さる一句、險峰を拓いて走る汽車、鐵路に消行く白雲に又み無き山陰のじんめりさを想像させ易かつた。潭碧の激流を開き行く一葉にも棹さす舟子の雅かさに嵐山の幽邃に掛る渡月

橋の絶景が再び色勝りして眼前に漂はしめたらう。單曲線の峻起した富士形の丘陵に同じ美濃平野を圍る飛彈山を更に想ひ倣ひ易かつた。

件し山を見なれた自分等に變る流や移る水には時しも目を惹かざるを得なかつたが矢張根氣の乏しく飽き易い爲め鑑賞美の力も再び起し難いものとなり、ものうい山旅に行き惱み出したヤレ——と一息、辿つた古い舞鶴町。下車は略々正午と覺しい。海らしい氣配は影一つ見せ無い殺風景の町、誰しも疑ひを惹いたに違無い。二三百米餘の丘陵程度の堆積が町を長い帯形のものにして居る。程三十分の徒歩に初めて川を渡る、そこに海の一瞥が味ひ得た。川岸に沿いて北進する、漁村の臭氣は一層甚しい。山坂をつまさき登りに昇る足下は内灣の漣が頻に笑つて居る様だ。小さい半島形の丘嶺に四門の鎗彈砲が据付けられて居る。恰もうら若き舞鶴姫の深縁に繁るお髪しに挿翳す簪の如く髻に觀測所を頂いて額に色づく楓に血をそ、らせて居る。要港の事にて設備の明細な説明は控へたいが砲臺の頂上よりの眺望は西に舞鶴富士を迎え、灣水愈々條然として風なぐ秋日和の瀉は全くあの荒き極き驛を宿す黒潮の日本海とも思へぬ迄に、詩的一情景を列べて宗教家の強健的旅行者を迎ふるに相應しき感が多かつた。山嶺のテレンスコープに數名の兵士の實測に餘念が無い。前方に豁然たる新舞鶴灣に連る峰間さして一雙の蒸汽船が走つて行く。外

はかすかに日本海が浩渺として煙つて居る、兩岸の急傾斜の山足は驚いた許に海中に没足し、山腹は紅葉のほのめきに秋のあわれが著しい様子だ。丁度其時頭上で鷹が盛んに飛ぶ、鷗も飛ぶ。嚴整な砲衛見學畢り午後三時半重砲兵隊に宿營す近代的なスレート葺きの兵舎を圍る紅葉樹は氣持のよい一夜を尙更に想像させて止まないものであつた。最近武器の毛偉力を見學の後各班の定床に就いた。

二班に分かれた一行は入浴後酒保で遊ぶ事になつた。鑑鈍饅頭鰯安部川餅善哉と言つた様な接待、太文字で安憤が張り出されて居る質朴な喫茶店に夜も無く盡き無き勞疲を吹き返し乍ら彼れ此れ騒いで居る、明も無く壞れたレコードの響が聞え出す、又變調なチャズが鳴り出す。茶碗の破片でも軋る様な俗語に、しかつめらしい軍營を離れて、柔かな世俗に浸る様な氣に爲る。矢張り其處にも酒保の一夜を歡樂のキャンプとして味ひ得るも得難い皮肉な對照であらう。消燈迄かなり時間がある、班では盛にチームブレイや雑談で賑はつて居た。外庭ではのろしの信號を練習して居る、暗夜は次第に露重く、點々たる恒星は寂けさを保たしめ轟然として列車が敦賀へ走る。後は再び寂浙の荒野の如く、一吹々々聲の消ゆると共に、靜かに消燈ラツバに夢路を辿る。(十月二十日)

朝は再び恵れた晴天、出營教練實習後新舞鶴へ行軍、途中斥候演習あり午前十一時要港防備隊に到着す。百五十米突餘

の丘陵半島に第二の復讐を爲せる港一體に大小の兵艦が碇泊して居る。四面の風光よりしては全く險巖相逼するの要塞は誰一人思ひ得ぬ。詩も生き繪も暮す人々への貴き文化資料でも言ひ得やう。聳え立つ天空を摩する大アンテナ柱、轟々騒々殷々たる工作部のエンヂン、寢たる妾や東山に親む一行に晒然たらしむる許りである。食後(兵舎のバックを握り固めた辨當に咽喉を通して)引卒者によりて幾多の建物を廻り、三保團の慘事を語る主なき魚形水雷を見ては英靈にしばし默禱を捧げ、終つてランチで軍艦吾妻(約一萬トン)の見學に乗船する。旭日潮風に翻る莊嚴其のもの、軍艦旗に低頭崇敬の靈妙なる英感に動かされざるを得なかつた。思へば古き大海戦の苦痛と忠誠に竭されたる敵彈の戰慄すべき其の凄き痕に、にじむベンキに涙を濺かざるを得なかつた。一彈の破片に一片の肉を残して英靈は遠き聖土に威光を悦ぶならん。旭日昇天旗の立つ所、其處傲然として帝國を仰がしめ世界に富む日本國民性の確立を誰か喜ばざらんや。犠牲に繼ぐ榮冠讚美と誇張を、世界は存する限り人類は語り繼ぐ限り、歴史は其の眞理を繰返し行くものならん。涙を呑んで去り、別を惜んで工作部を一覽す、ドツクは今や一萬噸級の軍艦建造中である。汗と油に穢れた作業服を着けた千餘人の人々は亦更に温い報國の忠誠をハンマーの音に依つて語つて居る。黄い煙が眼前を漂ふ、涙が苦痛に堪え兼ねて染染む、やつこの事

午後三時過無事歸營、四時十八分發天橋へ急ぎ出す。

四所東雲は取るに足らざる山陰の村落で山端を撫で乍ら十數ヶ所の隧道を抜ける。車の進むに伴れて日は増々傾き出した空は心持ち曇つて居る様に見え、由良近く來た時初めて栗田灣が見え出し、水煙の曇つた日本海上は大島小島の二孤島が夢の様に浮いて居る。レールの脚下は絶崖の海汀、大海の怒濤は足踵に唸を立て、居る。對岸の山影は紫色に暈く夕陽の霞に神祕の神を宿して居る様だ。丁度遠洋航海に疲れ切つた船客が上陸の剎那を想像して陸地の山影を茫然として望むが如き言ひ得ぬ情緒の關聯が涌いて居た。由良の村岸に立つ煙の濱の眞小砂に崛起した夫婦岩の二本松に戦ぐ風情や、磯の蘆屋に軒並べ焼や藻蟹の身も宮津に憧れつ、名も芳しき由良のうら帆を横に別れ、栗田が在を鼻に見て、浦に釣する蟹小舟、其の漁火も數を知り、歎乃僅か夕なぎに浪間を傳ひ漏れ聞ゆるほの暮き彼方に、波間に憩ふ天橋樓を見詰め出した。宮津の町々は錦繡の帳暮れ行かんこせる、靜けさの港であつた。一刻々々に心的暗示と強制から山陰の古雅に漂然たる壓迫階級の遊戯としてプロ牛活の漁村に離隔反目せる三絃の呻も長き高樓のフアミリヤアな俗謠に耳を欽て心を驚かさざるを得なかつた。暮六時近く天の橋立驛に到着、松影樓に投宿各々夜の橋立探りに散り出した。自分は其の間、裏に高なる黒潮に小舟流して戯れつ、水に映する不夜城に又しも鳴らす

三味三昧、漏ら笑聲も稍さびて、水の都の夜の風情にゴンドラ渡すベニスを想ひ得難くして其の夜も友を歡び明し、聖あり鬼ある藏腹なき語ひは、夜の女神に搖れつ、靜まりぬ。

風吹き騒ぐ松の響きに、宿を出て朝靄去り難き天橋松の下露に袖拂ひつ、是處彼處さ歩き廻る。濱砂少なき文珠の岸は松根に潮の打か、り水にも松の立ち居るかさ、怪しみぬる許りである。打ち寄せたる藻草の中より匂ふ不快も去り得ぬ印象も成つた。モーターボート二隻で雁行して橋立を右に眺めて江尻に向ふ。便利なケーブルカーも利用されず、徒歩で傘松望橋臺に登る。連中は盛に例の名物天之橋立マタのぞきをやつて居る。自分も申し譯が無さ、うなので記念にのぞいて見た、併し其の時各目に氣付いたのは、矢張り有のま、をありのま、で見る。釋算法の眺望が吾等佛教徒としては勝れては居るまいか。無理をして見る可き處には解脱の四諦も正道も佛の本願も屁のかつばだらう。眇漫たる宮津灣は風無き湖水に等しく鏡面燦として青天に映えて居る。中を等しく青松の一路は、天下の絶景として古へより稱へられ、勇大なる我が大和魂を顯現するが如き天の橋立たる事を肯ず。東北の大自然日本海を含み、橋の背後に半島の小高き山影は、南山の影を浸さざれども水愈濕然たるに勝るの感が深かつた。碧海を貫く勇莊の美、以て報國忠君の全民を賞く赤誠の意氣、粹然として神洲に鍾り、秀で、は富士の嶽を爲り巍々として千秋に

舞ゆるに安んぞ異らん。彼天橋は洋々として八洲に駕せり焉
もろこし西湖の柳浪聞鶯斷橋殘雪の八景に比較を許す可き
ものにはあらざる可。一行は勇大剛毅の天橋をバックにレン
ズに入る。足もこに立ちたる一札——陸軍省（ウツァー・オ
フィス）——の朱點に詩的文的な文柔の韻を驚かし、すさまじ
きものとして成相山に歩を運ぶ。つま登の二十町を鼻歌交り
で景氣附く、路畔の櫻楓は參詣の衆の眼を惹く、茂る山腹に
古い石疊が見える、山門は全く白苔に埋れさうだ。鐘樓は四
本の杖を便りに法音を出し草木有情を度し將に涅槃に入り給
ふが如しだ。綠蘿の垣翠黛の山に覆破れては露不斷の香を燒
き言々もかゝるあわれも袖しほらる。觀世音に賽して直に歸
途に就く。三四人の老人巡禮團體が草鞋脚絆金剛杖で鈴振り
鳴らしつゝ、登つて來る、山の笹原から吹き上る風は汗じみた
肌には何んとも言ひ得ぬ心地がした。午前十時天の橋立を通
り名残の氣分を充分吸ひ込んで、智慧寺の文珠前に參拜して
十一時遂に橋立の地に別れ、恙無く一行歸京す。途中綾部刻
車待合の時間利用で大本教本部へ參詣す、二時間半餘の山陰
線には又誰れも彼れも夢の旅であつた。自分は其の時此の得
難い經驗に少なからざる感謝を拂つて居た。そして大本教に
依つて配られたトラクトの隅までを漁つて居る、何んだか氣
分が沈み勝になつた時にふと氣付いたのは老人子供の半乞食
程度の二人巡禮である。彼等の眼は悲哀で充されて居る、救

はる可き宗教を求めて、助かる可き教を求めて果た亦誰人か
の菩提を弔ふて寒心堪え難き悲の旅行者である。彼等の口には
未だ聲枯もせで寂かに夕まぐれに傳ふ遠寺の鐘の響の如く
言ひ得ぬ靈感の巡禮歌が流れ出るのであつた、自分は古刹成
相寺に登つた時、一人の老人が稱へる御詠歌に茫然として聞
きつゝ、あつた過去に詠歌を想ひ出した。涙を以て人生を語ら
んさせらるゝ、逆境の人々は斯した悲劇の一場面には強い共鳴
の衝動が抑壓し難いものであらう。鈴の音に聯想し、聞ゆる
詠歌にほだされて解き得ぬ人生の無常を度し給ふ可きこの拙
文の讀者たる能化の諸師よ、旅による多くの逆境、其他の惱
ある人々に接觸し、行く可き白道の啓發者たり給はん事を。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。